主日礼拝　　２０２４年3月１７日（日）
題　『イエスを知らないというペトロ』
テキスト：ヨハネによる福音書１８章１５～２５節

今わたしたちは、受難節の日々を歩んでいます。今日の聖書の個所は有名な個所で、受難節の時には、必ずと言ってよいほど日曜日の礼拝で読まれます。
今日は宣教のタイトルに「イエスを知らないというペトロ」とつけました。
イエスが３度にわたってイエスを知らないと拒んだ出来事が記されている場面です。今年はヨハネによる福音書ですが、この他の福音書、つまりマタイによる福音書でも、マルコよる福音書でも、ルカよる福音書でも記されています。
以前にもお話しましたが、わたしは高校生の頃大阪の工業学校に通っている時の国語の教科書にこの場面のことを中心としたロシア人の作家であるチェーホフの「学生」という題の短編の小説が載っていました、まだ教会にも通っていない時期にこの小説によって、聖書の物語に出会ったのでした。とても心に残ったことを思い出します。人であれ、何であれ、出会いの不思議さを思わされます。
さて、「ペトロ、イエスを知らないと言う」出来事の内容は４つの福音書で一致していますが、その伝え方にはそれぞれの福音書記者の特徴があるようです。
今日の個所を共に学び、神の言葉に聞きたいと願っています。
「15:シモン・ペトロともう一人の弟子は、イエスに従った。この弟子は大祭司の知り合いだったので、イエスと一緒に大祭司の屋敷の中庭に入ったが、
16:ペトロは門の外に立っていた。大祭司の知り合いである、そのもう一人の弟子は、出て来て門番の女に話し、ペトロを中に入れた。」と記されています。
「シモン・ペトロ」とは、１２弟子のリーダー格の人で、ガリラヤ湖で魚を捕っていた漁師でした。ペトロは漁をしている時にイエスに出会い、イエスから「わたしについて来なさい。」と招かれてイエスについて行った、最初の弟子でした。
「もう一人の弟子」というのは、弟子になったヨハネのことで、このヨハネによる福音書をまとめた人物だろうと、新約聖書の多くの研究者は言っています。このヨハネは大切な場面に登場しています。
このペトロとヨハネがイエスに従ったのです。「この弟子は大祭司の知り合いだったので、イエスと一緒に大祭司の屋敷の中庭に入った。」とありますが、イエスの生きた２０００年前当時、普通の人は、大祭司の屋敷に入ることはできませんでした。大祭司とは、当時のユダヤ教の最高の地位についている人物です。多くの祭司の上に立ち、全ユダヤ人の生活を指導する立場の人だったのです。
ここでは弟子のヨハネは、大祭司の知り合いだったと言われています。ですか

ら普通の人の入ることのできない大祭司の屋敷の中庭に入ることができたようです。
ただここでの大祭司は、当時の大祭司の名前はカイアファという人物でしたので、実は大祭司カイアファの舅（しゅうと）ではないかとも言われています。名前はアンナスで読み方でハンナスとも言われます。弟子のペトロは、同じ弟子のヨハネの助けによって大祭司の中庭に入れたということです。
しかし、この中庭でペトロにとって予期せぬことが起こったのです。
「17:門番の女中はペトロに言った。「あなたも、あの人の弟子の一人ではありませんか。」ペトロは、「違う」と言った。」ペトロは「そうです。弟子の一人です。」とは言えなかったのです。ペトロを責めることは、わたしにはできません。皆さんはいかがでしょうか？この時のペトロの気持ちはどうだっだろうか、と思います。気が動転したでしょうし、正直、恐怖心もあったと思うのです。
「 18:僕や下役たちは、寒かったので炭火をおこし、そこに立って火にあたっていた。ペトロも彼らと一緒に立って、火にあたっていた。」炭火の光に照らされた不安げなペトロの顔が浮かび上がってくるかのようです。
そして、遂に「大祭司がイエスを尋問する」場面です。イエスの生死に関わる緊張する場面です。
19:大祭司はイエスに弟子のことや教えについて尋ねた。
　大祭司アンナスの取り調べの場面で緊張します。イエスを中心とするグループ、組織とその教えの内容を調べたのです。
 イエスは答えます。２０節「わたしは、世に向かって公然と話した。わたしはいつも、ユダヤ人が皆集まる会堂や神殿の境内で教えた。ひそかに話したことは何もない。この時、イエスは緊張もしたでしょうが、冷静に淡々と語っているように思います。
 21:なぜ、わたしを尋問するのか。わたしが何を話したかは、それを聞いた人々に尋ねるがよい。その人々がわたしの話したことを知っている。」22:イエスがこう言われると、そばにいた下役の一人が、「大祭司に向
　　かって、そんな返事のしかたがあるか」と言って、イエスを平手で
　　打った。　イエスへの暴力行為であり、威嚇、脅しです。
 23:イエスは答えられた。「何か悪いことをわたしが言ったのなら、その悪いところを証明しなさい。正しいことを言ったのなら、なぜわたしを打つのか。」
緊張感が高まっていく場面です。
 24:アンナスは、イエスを縛ったまま、大祭司カイアファのもとに送った。
一歩もひかないイエスの態度に、自分でもこれ以上どうすることもできないのか、責任を逃れるかのようにアンナスはイエスをイエスを縛ったまま、大祭司

カイアファのもとに送ったのです。
　そして、聖書は大祭司カイアファの屋敷の場面を伝えています。
ペトロが重ねてイエスを知らないと言う､いよいよクライマックスの場面です。

25:シモン･ペトロは立って火にあたっていた。人々が､「お前もあの男の弟子の一人ではないのか」と言うと、ペトロは打ち消して､「違う」と言った。
ここでもペトロは、自分に迫る「お前もあの男の弟子の一人ではないのか」との言葉に､「弟子とは違う」といいました。
26:大祭司の僕の一人で､ペトロに片方の耳を切り落とされた人の身内の者が言った。「園であの男と一緒にいるのを、わたしに見られたではないか。」
静かな詰問です。ですから更に緊張感は高まり、恐怖感は強まったかもしれません。27:ペトロは、再び打ち消した。するとすぐ、鶏が鳴いた。
　この時、一番古い時期に記されたマルコによる福音書に記録されているイエスのことば、マルコによる福音書１４章２９節以下で、ペトロは「たとへ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません。」と言っています。それに対してイエスはペトロに「はっきり言っておくが、あなたは、今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないというだろう。」と言われ、そのイエスの言葉が実現したのです。神の子イエスはすべてを見通しておられたということでしょう。
わたちたちは、弟子たち、特にペトロの不甲斐なさを責めることはできるでしょうか? それはできないと思います。わたしたちにも似通ったことはそれぞれ心の内を偽らずに振り返ってみれば分かるのではないでしょうか?
人には分からなくても神さまには分かるのです。しかし、不甲斐なさをあらわしたペトロはそれで終わりではなかったのです。ペトロには、イエス復活の後、再出発の時が備えられていたのです。イエスは十字架に死なれ、復活された後、弟子たちにその姿を表されました。ヨハネによる福音書２１章２２節に記されているように、イエスは挫折したペトロに「あなたは、わたしに従いなさい。」と声をかけられたのです。そのイエスの声の響きと内容はこれからを生きるわたしたちにも向けられているのだと信じます。
イエスを知らないと言ったペトロ、またここにいる私たちひとりひとりも
これからもイエスの愛のまなざしに見つめられ、神さまに憐みに包まれて用いられて行くことを信じます。共に主イエスについて行く主の道を歩みたいと願います。